

団体名	江田島市	所属	消防本部	他団体等との連携	—
連絡先	警防課 (0823)40-0119				

取組事例名	軽救急車の整備	取組期間	平成25年度～
--------------	---------	-------------	---------

取組の概要 ～ 軽救急車による救急業務の実施

高規格救急車では進入できない道路狭隘地区において、早期に傷病者に接触し、救命率の向上及び容態悪化の防止を図るため、必要な調査を行った上で、中国地方で初めてとなる軽救急車を導入した。

取組の背景 ～ 江田島市の道路事情と救急体制

江田島市は島嶼部特有の地形で、海岸沿い周回道路は整備されているものの、主要道から各住宅に至る市道は幅員が狭いことに加え、屈折している箇所や、急勾配の箇所が多く、また、救急救命士の処置拡大に伴い救急車の大型化が進み、現在配備されている高規格救急車は市道の多くを走行することができないサイズとなっている。

このため、主要道から遠く離れている現場(住居等)においては、徒歩で移動し、傷病者を収容後、再び主要道まで担架搬送することとなることから、現場到着や病院収容に時間を要し、傷病者の容態を悪化させる可能性があり、迅速に傷病者を収容して病院へ救急搬送する体制について検討する必要がある。

平成23年に「救急業務の実施基準」の一部改正により、以前では認められていなかった「軽救急車」の運用が可能になったため、軽救急車の導入について検討を行うこととした。

取組のねらい ～ 格差のない救急業務と救命率向上

軽救急車を活用することで、道路狭隘地区における行政サービスの格差を解消し、傷病者接触及び医療機関収容までの時間の短縮を図り、救命率の向上及び傷病者の容態悪化の防止を図れる。

取組の具体的内容 ～ 導入に向けた調査と軽救急車の製作

1 進入路調査

軽救急車導入に向け、高規格救急車が進入できない地区を選定し、実際に軽自動車でも進入できるかについて、現地調査を実施した。

この調査結果により、高規格救急車との現場到着時間を比較すると、江田島市能美町で平均4分45秒、沖美町で6分33秒短縮されることが試算された。

2 通信指令台への登録

上記調査結果に基づき、指令室の支援情報検索装置に軽救急車進入可能場所のデータを登録し、119番受信時に、軽救急車または高規格救急車のいずれかの出動が有効であるかを識別できるようにした。

3 救急車の製作

軽救急車は県内で導入した例がなく、また、艀装業者も同様に作製実績がないため、導入実績のある県外消防本部等から情報を収集し、艀装業者と詳細に打合せを行ない作製にとりかかった。

4 軽救急車の運用開始

平成25年12月に軽救急車が納車、進入路の再確認及び取扱訓練を実施し、同年12月26日から運用を開始した。

取組を進めていく中での課題・問題点 ～ 軽自動車としての制限

- 1 軽救急車は、高規格救急車と比較し、心肺蘇生等の処置を行う際のスペースが少ない。
- 2 軽救急車の定員は4名で、傷病者に付添う者の同乗ができない。

創意工夫した点 ～ スペースの有効活用・広報活動

- 1 限られたスペースを有効に活用できるよう空間スペースを利用することで、自動心マッサージ器等の資機材を積載し、心肺蘇生等の処置を行う際のスペースを確保した。
- 2 傷病者の付添いが同乗できないことについては、本市の広報誌やホームページで事前に広報し、救急現場では丁寧な説明を行なうこととした。

取組の成果（効果） ～ 導入後のメリット

- 1 配備している能美出張所の救急件数の約15%が軽救急車の出動となっている。
- 2 軽救急車の導入により、傷病者接触時間の短縮が図られた。
同場所に高規格救急車で出動した場合と比較して計算したところ、最大で7分、平均で3.3分短縮される。
- 3 救急隊員の傷病者搬送に関わる疲労は確実に軽減され、救急隊員が救急救命処置に専念できる。

今後の展開 ～ 市内全域の出動態勢

軽救急車は能美出張所に配備しているため、本署の出動管内の道路狭隘地区はカバーできていない。今後は、市内全域をカバーするため、現行軽救急車のデメリットの解消にあわせて、本署への導入配備に向けて調査・検討している。

他団体へのアドバイス ～ 市民の安全・安心を確保するために

本市と同様に、島嶼部や山間部で高規格救急車が救急現場まで進入出来ない道路狭隘地域を抱える市町は多くあると思われる。

道路狭隘地区での軽救急車の活用は、傷病者接触までの時間が確実に短縮することができるため、傷病者の救命率の向上を図るうえで大変有効であり、公平な行政サービスと市民の安全・安心の確保に役立つものである。

外 観



車 内



狭隘路走行状況

